



はやね はやおき 朝ごはん テレビを止めて外遊び

きずな

～きらきら にこにこ いきいき～

平成28年度
別海町立上西春別小学校
学校だより No.12
平成29年2月28日
発行責任者
校長 横澤 英三

北方領土と3.11

平成28年度も残すところ一ヶ月となり、お別れのシーズンが近づいてまいりました。

2月に入り、インフルエンザが猛威を振りました。22日現在で延べ35名の児童が罹患し、2・4・6年が学級閉鎖となりました。下火にはなっていますが、今後も予防に努めて参ります。

さて、毎年東京で行われる中学生「北方領土に関する」スピーチコンテストに会場審査員として参加させてもらっています。今年は2月25日に開催され、北海道からも鹿部町の中学生が立派なスピーチを披露しました。

毎年心に残るスピーチを中学生が発表しますが、その中でも、一番心に残っているのが、4年前のコンテストで審査員特別賞を受賞した、福島県の生徒のスピーチです。タイトルは「ふるさと」です。

先日、地元の新聞に次のような記事が掲載された。「古里を突然追われた人たちがいる。原発事故による避難者ではない。歯舞群島、択捉島、国後島、色丹島の『北方領土』で暮らしていた、1万7千人だ」
北方領土。今まで全く関心なかった場所である。もちろん北方領土という言葉は聞いたことがあった。しかし、自分に関係のない言葉であり、場所であった。

いや、北方領土だけではない。日本の国土や領土自体を考えることもほとんどなかった。考えなくても、普段の生活を送ることができたのだ。私の中の日本は家庭であり、学校であった。

(中略)しかし、一昨年3月11日に発生した東日本大震災が、領土、とりわけ北方領土に対する関心を強くした。

現在、私も自分の古里にもどることができない。私が住んでいた福島県伊達郡川俣町山木屋地区は、東日本大震災に伴う東京電力福島第一原子力発電所の事故の影響で、計画的避難区域に指定されている。私自身、震災以降、避難場所や仮設住宅を3回も移動している。山木屋地区の除染活動は行われているが、いつ戻るのか、安全な生活を取り戻せるのかはわかっていない。

同じ日本の領土でありながら、北方領土も私の古里、川俣町山木屋地区も立ち入ることができない。私は去年の10月まで生徒会長として、様々な支援やマスコミの取材を受けてきた。

しかし、今年度に入り、そういったものが少なくなってきている。どんどん日本国民が、今回の震災に対する関心を失っていることが感じられる。

北方領土の問題も同じではないだろうか。多くの日本人にとって、北方領土問題は自分の問題ではない。テレビや新聞でも大きく取り上げられることは少なく、また学校で学ぶこともほとんどない。

結局、どれだけ関心を持ってその問題に取り組むかが大切なのだと思う。つまり、領土問題の解決の第一歩は、私たち日本人が自分の領土に関心を持つことだ。

何が正しく、何が間違っているのか。そういったものを学び、解決するための方策を考える必要がある。次の世代の日本人が、北方領土も私の古里にも自由にいける時代が来るように、私たち若い世代が関心を持って取り組んでいかなければならない。

東日本大震災から数えて6年を迎えようとしています。この生徒が住んでいた川俣町山木屋地区は、この3月31日ようやくすべての避難指示が解除され、自由に立ち入ることができるようになります。しかし、こうした状況も、今では報道されることはありません。確実に関心が失われていることは事実です。

一方、北方領土の元島民の平均年齢が81.3歳となりました。元島民の方々が、自由に島に帰ることができるのはいつの日でしょうか。かつて、北方領土問題の研究者が「ソ連(ロシア)は、日本が北方領土問題を口にしなくなる日を、じっと待っている」と言っていました。確実に語り継ぎ、国民が関心を持ち続けること。この福島県の生徒のスピーチから学ぶべきことは、非常に大きいと思います。

校長 横澤 英三